

特殊廃水処理施設年報から環境管理センター報へ

広報出版ワーキンググループ

薬学部教授 篠田 純 男

本号で環境管理センター報も第7号となる。7号というのは別に節目にはならないが、センターの前身である特殊廃水処理施設が昭和50年に設立されてから10年を経過したので、本号ではこの10年を回顧する企画を組んだ。初期の施設長の工学部高橋克明教授および藤田公明教授、当時建築課長として建設に尽力された現施設部長栗栖俊明氏らに当時の思い出を執筆していただくとともに、センター報自身の歩みも振り返ってみた。

施設設立の翌年特殊廃水処理施設年報が施設関連の学内規定、業務報告を中心とした内容で出版された。昭和53年無機廃液（旧特殊廃水）処理施設と有機廃液処理施設が統合されて環境管理施設が設立されたのを機に、翌54年環境管理施設報第1号が出版され、昭和57年からは施設の拡大・名称変更に伴い環境管理センター報と名を変えて現在に至っている。同じく57年からは広報出版を担当するワーキンググループがセンター内で組織され、巻末に示したメンバーで本誌などの出版物の編集に当たっている。

第1号は当時の小坂学長に発刊の辞をお願いし、藤田公明施設長の挨拶、高橋照男無機廃液部門長および森分俊夫有機廃液部門長による各部門の紹介、学内規定、業務報告などが主で、『水質の総量規制』が話題として掲載された。COD 総量規制の実施の適用により津島地区排水基幹計画が実行に移されたわけで、総量規制問題は大学の構成員全員に周知させる必要があり、第2号でも詳しい解説がされ、その後も折に触れて関連の記事を掲載してきた。

第2号以降ではセンター（施設）関係者以外の方々からの提言や解説記事をいただいている。理学部桐栄恭二教授『岡山大学の排水対策はこれで良いのか』、医学部佐伯清美教授『岡山大学鹿田地区における環境保全』、薬学部早津彦哉教授『環境汚染物質としての変異原』などである。第4号からは『利用者の声』欄を設け、利用者の率直な意見、感想を掲載してセンターの運営に生かしていこうとの試みがなされている。毎号1～2名の方をお願いしてきたが、第7号ではなるべく多くの方の意見をということで4名の方をお願いした。建設的な御意見を伺いながらセンターとして十分な対応がとれていないのが現状であるが、徐々に成果を挙げていきたいと考えている。

環境管理センター内で開発研究された処理あるいは分析技術についても第2号以降掲載してきた。『エマルジョン燃焼法』、『亜フェライト法』は新技術として実際のセンターの業務に役立ってきており、『フローインジェクション分析法によるCOD計測』は将来実用化が期待されている。第6号では、『染料・絵具廃水の処理』として通常は無機あるいは有機廃液の処理法では処理できない廃水に対する処置の具体例を取り上げた。

第4号、5号では津島地区排水基幹整備の進行に伴い、事業の内容や意義の解説にかなりの紙数を費やし、第6号では工事完了を踏まえて大藤学長とセンター関係者との間で行われた座談会『環

境管理センターの現状と展望』を掲載して岡山大学が当面している環境問題を利用者に周知出来るよう努めた。第6号から『ズーム・アップ』欄を設けてセンター職員が取り組んでいる業務内容の紹介を行っている。その他教育・研究活動の報告として技術指導員および水質管理員の講習会、実習、見学、環境週間のセンター施設解放などの実施状況が報告され、対外活動として『大学等廃棄物処理施設協議会』での活動報告、業務報告として廃液排水処理結果および処理計画などが掲載されている。

このように30頁で出発した本誌も次第に新しい企画を盛り込んで70～80頁のものに定着しつつある。内容の充実は喜ばしいことであるが、分厚くなり過ぎれば読者に敬遠される心配も多い。本誌はセンターの業務内容を利用者に理解していただき、利用者全員が適切な廃液排水の取り扱いを行って大学の環境をより良いものとするを目的とするものである。しかし業務報告誌的色彩の強い雑誌の通例として利用者に十分に読まれていないのが現状かも知れない。本誌がセンターと利用者のパイプ役を十分に果たせるよう企画を練りたいと考えており、御意見をお聞かせ下さるようお願い致します。